

## 波多野 綾子 (Hatano Ayako)

2022～2024 年度奨学生

オックスフォード大学 法学部 博士課程

### トリニティ・ターム

オックスフォードのタームは、10 月から 12 月のミカエルマス (Michaelmas) ターム、1 月から 3 月のヒラリー (Hilary) ターム、4 月から 6 月までのトリニティ (Trinity) ターム とオックスフォード独自の名前がついています。ターム期間中は、毎週授業や各種のシンポジウム、セミナー、ミーティング、ゲスト・トークなどがあり、非常に活気があります。トリニティ・ターム (2022 年 4 月 21 日～6 月 18 日)、私自身も聴講している国際人権の授業に加えて、様々な研究会への参加、所属する学術系サークルの運営や学会への応募や参加などかなり慌ただしくしておりました。

授業では、2021 年の秋から行われていた博士課程 1 年目の必修授業である Course in Legal Research Methods (CLRM) (2021 年 10 月～ 2022 年 4 月) においては、5 月に行われた CLRM カンファレンスにおいて、博士論文で使用する方法論のプレゼンテーションとコースでの学びをまとめたレポートを提出し、を修了しました。このコースでは、教義的方法、法理論、法制史、比較法、実証的法学研究、学際性など、様々な法学的方法論に対する理解を深めることができました。また、Linda Mulcahy 教授によるコース「質的研究法」(2022 年 1 月-2022 年 4 月) を修了し、社会法学的方法論に対する理解を深めました。このように、法学博士課程 1 年目では、主に方法論についてそれぞれの研究に適した手法を特定し、それを深めることを求めら

れます。それに加え、指導教員にすすめられて履修した Nazila Ghanea 教授の Domesticating International Human Rights Law (7 月) のコースでは、まさに自身の博士論文のテーマにおいて、深い洞察や視野の広がりを得ることができました。

これらのコースに加え、指導教官や同僚の方々の親切な指導とフィードバックに大変感謝しています。また、オックスフォード大学法学部のボナヴェロ人権研究所の常駐研究生として、研究会や大学院研究フォーラムに参加し、研究テーマや今後の研究に対して多くの示唆を得ることができています。特に、ボナヴェロ人権研究所では、「ビジネスと人権」に関するノン・クレジットコースを修了し、また、オックスフォードビジネスと人権ネットワーク (OxBHR) の運営にも関わることで、かねてから強い興味があった同テーマに関する知見や経験を積むことができています。

### トランスファーのための口頭諮問

4 月はかなり体調を崩しており、自身の博士論文のチャプターの執筆が予定どおりいかず、博士課程 1 年目の最後にせまった Qualifying Test と呼ばれる Transfara viva (トランスファーのための口頭諮問) が非常に心配でした。すでにご案内の方も多いかと思いますが、博士課程の学生は、1 年目は Probationary Research Student (PRS) と呼ばれる「お試し期間の研究生」という立場で、1 年目の終わりに、お試し・見習

いからのトランズファーのための口頭試験をパスできなければそこで課程修了となってしまふのです。とはいえ、博士課程に入って真面目に(?)研究を行っている多くのオックスフォード生には形式的なもので、落とされる人はあまりいないのでは?とっていたのですが、周りの学生に聞いてみると1年目でパスできず、修士号だけもらって国帰った、とか、1度目ではパスできず、数度の提出書類の書き直しと再提出を要求された、など恐ろしい話も耳にすることになり、正直大丈夫なのだろうかと戦々恐々だったのでした。口頭試問への準備などもあり、タームの終わった夏休み期間も(家庭の諸事以外は)研究研究の日々でしたが、なんとか無事に論文第1章と研究全体に関する提案書を提出、夏休みにかかりましたが、8月24日に口頭諮問を受け、二人の試験官から非常に有益なコメントとアドバイスをしつつ、正式なDPhil課程への推薦を受けることができました。現在は口頭試問でいただいたアドバイスをもとに、更に論文の執筆を続けています。

#### 学会・発表・出版

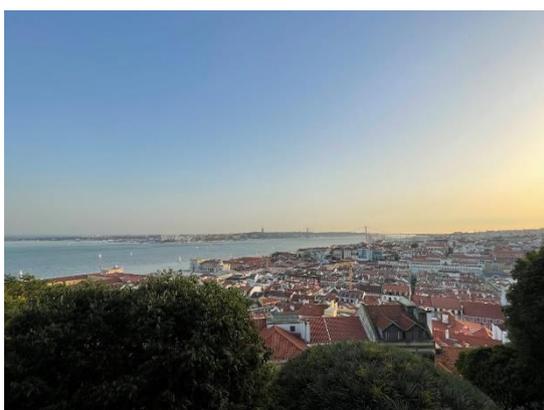
報告期間中、私はいくつかの学会会議や大会に出席・発表する機会を得ることができました(私自身の発表テーマについてはAppendixをご参照ください)。その中でも、特に大きな大会であったグローバル法社会学会議(Global Law & Society Meeting)リスボン大会は本年(2022年)について、簡単に共有させていただければと思います。

本大会は、7月13-16日、ポルトガルの首都リスボンのISCTE ( Instituto Universitário de Lisboa)で開催されました。新型コロナウイルス禍が収まらない中でオンラインも併用したハイブリッドの開催形態でしたが、97カ国から4651名(うち対面約

3000名)が参加する大きな大会となりました。リスボンは猛暑で、強い日差しが照りつけ、しかも会場では、小教室にクーラーが設置されておらず、マスク着用の強制と飛行機の騒音で窓を開けられないことなどにより、かなりの過酷な環境での発表・会議参加となりました。こうした中でも会場の内外で研究者の交流が盛んに行われ、私もセッションで自身の研究、「国際的なジェンダー目標の実現に向けて?: 女性の経済的・政治的参加及びリーダーシップに関する法律のもとにおける日本のジェンダー平等状況の分析 (Toward Aligning with International Gender Goals?: Analysis of the Gender Equality Landscape in Japan under the Laws on Women's Economic and Political Participation and Leadership)」について発表させていただくとともに、様々なセッションや会議に参加し、また、大会前に行われた若手ワークショップ(Graduate Student / Early Career Workshop)にも参加させていただくことができました。26カ国以上から集まった約60名の若手研究者や大学院生を対象とした同ワークショップでは、7月11日夜の船上レセプションに続く12日のプログラムで、北米・欧州・グローバル・サウスなど各地の研究者の雇用状況や求人の特徴と就職活動の行い方、研究生活におけるストレスと生産性、研究・教育・奉仕・社会貢献のバランスについて、助成金の申請の仕方、学位論文から書籍出版へ、学際性をいかにナビゲートするか、アカデミア外での協働や一般市民との関わりなど、非常に多彩なテーマに関するアドバイスや議論が行われました。ジャーナル投稿や書籍の出版について、経験談や投稿論文の審査経験などを交えた具体的なアドバイスは、博士論文の出版やトップジャーナルへの論文の投稿を目指す自身を含む各国からの参加者にとって、非常に役に立つものでした。また、

小教室に分かれての議論では、少人数の対話的な環境の中で、その分野の専門家から個々の質問に答えてもらう機会を得ることができました。

他方で、欧米やグローバル・サウス(特に南米)を中心にした議論が続く中、アジア、とくに日本を含む東アジアが取り残されているような危機感、もしくはアジアのアカデミックな場はグローバルに開かれていないのではないかという懸念も感じました。このような場においても、アジアの法と社会について、またアジアからの発信を強化すること、また若手も国際的なワークショップやトレーニングなどに積極的に参加していくことが必要だと感じています。



▲リスボンの街並み



▲会議の様子

また、8 月には、第 8 回国際四学会会議 (Four Societies Conference、オンライン、

8 月 16 日～17 日)で発表の機会をいただきました。四学会会議は、オーストラリア・ニュージーランド、カナダ、日本、アメリカ(以下、4 学会)の国際法学会が主催し、共通のテーマ(今年のテーマは「Areas Beyond National Jurisdiction」)のもとに、若手研究者が集い、学術発表・交流を行うことを目的としています。私は「サイバースペースでのヘイトスピーチに関する国際人権法の関わり (Engaging International Human Rights Law against Hate Speech in Cyberspace)」と題した発表を行いました。どの会議やミーティングでも、世界各国の若手研究者やシニア研究者とつながり、素晴らしい刺激をいただいています。坂口財団奨学生対象の年次大会 ON2022 においても、「ジェンダー・ギャップ」について発表・議論する機会をいただき、蜂谷理事長や他の坂口奨学生の皆様から、多くを学ばせていただきました。

#### その他の学術関連活動と社会生活

常に研究や締切に追われるプレッシャーを感じつつの日々ですが、ときに正装してカレッジでのフォーマル・ディナー、舞踏会やパーティーに参加する非日常も楽しんでいます。坂口生ともカレッジのフォーマルに呼び合ったりと、坂口国際育英奨学財団の皆様がつないてくださったご縁に感謝のつきない毎日です。また、7 月には、シアトルにて一週間、日米リーダーシップ・プログラム(USJLP)という、日米の若手のリーダーシップ育成プログラムに参加することができました。複雑かつ多方面に及ぶ国内外の 이슈を忌憚なく参加者と議論する機会を得られた素晴らしいプログラムでした。オックスフォードを中心に、学外のプロフェッショナルとも交流しつつ、専門知識を育てるだけでなく、人間としても成長していきたいと願う日々です。

以上

## Appendix

### RESEARCH CAREER

---

- Convener of the Oxford Business and Human Rights Network (November 2021-)
- Clarendon Council member (Cultural Secretary、 November 2021-)
- Graduate Researcher in Residence、 Bonavero Institute of Human Rights、 Law Faculty、 University of Oxford (January 2022-)

### ACADEMIC

#### PRESENTATIONS

---

- Hatano, Ayako. *Engaging International Human Rights Law against Hate Speech in Cyberspace*, The Eighth Four Societies Conference (Online, 16-17 August 2022) (Oral Presentation in English, refereed)
- Hatano, Ayako. *Toward Aligning with International Gender Goals? Analysis of the Gender Equality Landscape in Japan under the Laws on Women's Economic and Political Participation and Leadership*, Global Meeting of Law and Society (ISCTE University Institute of Lisbon, Lisbon, Portugal), 14 July 2022 (Oral Presentation in English, refereed)
- Hatano, Ayako. *Hate Speech and International Law: Internalisation of International Human Rights*. Clarendon Colloquium (University of Oxford, Oxford, the UK), 22 May 2022 (Oral Presentation in English)
- Hatano, Ayako. *Toward Aligning with International Gender Goals? Analysis of the Gender Equality Landscape in Japan under the Laws on Women's Economic*

*and Political Participation and*

*Leadership*, The Japanese Association of Sociology of Law 2022 Annual Academic Conference (Hybrid Conference. Seikei University, Japan), 20 May 2022 (Oral Presentation in English, refereed)

- Hatano, Ayako. *Dynamic Process of Internalisation of International Human Rights*, Bonavero Graduate Research Forum (BGRF), 11 May 2022 (Oral Presentation in English).
- Hatano, Ayako. *Toward Aligning with International Gender Goals?*, Colloquium on International Law and Asia at New York University School of Law, convened by Prof. Frank Upham and Prof. Jose Alvarez, April 2022 (Oral Presentation in English).